



市川一宏 先生

ソーシャルワーカーは専門職である前に一人の人間であれ！

いちかわ・かずひろ

ルーテル学院大学学長。全国・都道府県・市区町村の行政、社協等の計画の策定、実施、評価及び調査研究、人材養成・研修等に多数関わる。全国各地の実践から、様々な「地域の福祉力」を学び、各地域に合った地域福祉実践を研究テーマとしてきた。著書として、「おめでとう」で始まり「ありがとう」で終わる人生 福祉とキリスト教 教文館、「知の福祉力」人間と歴史社がある。



interviewer 松本すみ子
東京国際大学副学長
人間社会学部学部長

●伊豆大島でのボランティアが福祉との関わり

松本 まず先生が福祉に足を踏み入れた動機からお願いします。

市川 昭和46年、早稲田の法学部へ入学し司法試験を目指していた夏頃、私の友人からボランティアに替わりに行ってくれという話があり、私も息抜きに1週間位なら行ってみようかとなったのです。阿佐ヶ谷教会のボランティア活動の一環で、行先は伊豆大島にある藤倉学園です。これまで地域で知的障害の子ども達との接触の経験もなく、ドキドキして行きましたが、知的障害の子ども達と一緒に汗をかきながら畑仕事や遊びの中で、その子ども達に学ばせられたということです。

そもそも私が法学部へ行ったのは実家が倒産して、暴力団に押し掛けられたときの弁護士の対応している姿を見て、暴力団には負けれられない、弁護士になるんだという憎しみが動機でした。それが学園の子ども達に出会って、殻をかぶっていた心が溶けたというか、一人の人間として出会いがあり、憎しみで生きてはいけないと悟ったのです。

これが福祉に関わる私の原点です。その後、藤倉には定期的にボランティアに行きました。また知人の紹介で桐ヶ丘療護園のボランティ

アとして、新宿を車椅子の方々と一緒に歩いて「トイレを含めて、何てこんなに街にバリアが多いのか」という体験などもしました。

そのような中で、療護園の卒業生3人が共同で自立生活をしている住宅での家庭教師を引き受けて、私の家庭教師のペイはそこで食事を作り、それをいただくということでした。この共同住宅が拠点となってたくさんの人々との出会いがありました。そこには、どう自分はこれから生きていくのか、共に生きていくことの意味を日々理解し、学ぶという議論のテーブルがあったのです。

●福祉への道の決断と阿部志郎先生、三浦文夫先生との出会い

松本 先生は福祉の道への決断はいつ頃ですか。

市川 私が大学3年生の頃、ボランティア活動を通して、自分の生き方が問われ、将来の道を模索しているとき、横須賀基督教社会館館長阿部先生を訪問できました。先生から人間の命と存在への敬意、ボランティアは共に生きていく明日を目指す行動であると教えていただき、私が目指すべき明日が見え、福祉への大きな方向転換の力となりました。

その決断を家族に告げたと大変な反対にあいました。それでもこれまでの出会った人たち、実践し、見聞してきたことの蓄積がエネルギーとなって決断できたのです。

松本 それから日本社会事業大学の社会事業研究所の研究生ですか。

市川 社事大から東洋大学大学院生として今岡健一郎先生、杉森創吉先生の指導を受けました。そして杉森先生の紹介で三浦先生にご縁をいただき、サービス供給体制論を学びました。三浦理論は専門的援助の大切さを認め、福祉政策を科学的に明確にした理論で、イギリスのソーシャルポリシーに焦点をあてていた私の研究に大きなヒントをいただきました。先生にはたくさんの行政計画や社協計画の作成に関わらせていただきました。

●「接ぎ木」「足を靴に合わせる」とは？

松本 先生は何を大事にして取り組んでこられたのでしょうか。

市川 「接ぎ木の取り組み」です。私は理念、ポリシーを打ち上げて、そこに計画、政策、実践とかを当てはめるだけでは無理があり、むしろ地域の地盤があって、そこに接ぎ木をしていく、これが本来の姿であろうと考えました。これが三浦先生との多くの委員会などで得た結論的な思いで、地域に合った計画を作ろうとした「接ぎ木」の試みです。

松本 それと「靴に足を合わせる」のではなく、足に靴を合わせるという話もありましたね。

市川 それは和田敏明先生の存在が大きかったですね。たくさんの社協や現場を紹介していただき、支援するためには、計画の必要性を皆で共有することはもちろん、それぞれが地域の様々な生活問題に具体的に対応できるように、危機感をもって、自分を、組織を変えていく必要があると。当事者、住民、ボランテ

ィア、社協や行政職員等と語り合い、学び合いながら「したいこと」「できること」「求められていること」を具体化した取り組みを継続していくことが大切だと教えられました。

松本 先生が学生たちに教えることの原点は何でしょうか。

市川 学ぶモチベーションをどう一緒に学生たちとつくり出していけるのか。大学・大学院生活は、人生のプロセスであって、なぜ学ぶかという根源を振り返る視点を築くこと、人としての心がけを忘れないということです。私も学校に行くのが嫌になったことがあり、それが戻る事ができたのは、先生、ボランティア、教会があったからでした。学生は学校だけで自己完結するのではなく、様々な出会いを通していろいろな人に学んで、それを日頃の生活に生かしてほしい！ このことです。

松本 大学生の4年間はすごく伸びる時期ですよ。そこに教員として寄り添うときに、何を大事に寄り添えばいいのでしょうか。

市川 それは2つの見方があります。一つはその人の持っている能力をどう見るか、能力から見ての努力の部分の評価をきっちりとする。そしてもう一つの原則は、スタンダードとして基準をクリアしているのか。つまり「マスト」、援助の際に守るべき倫理、適切な日常業務という部分と「ウオント」、援助の質を高め、利用者の生活を取り巻く様々な資源を開発する等の部分を組み合わせるところに意味があるのかなど、思いますね。

●SWは専門職である前に一人の人間であれ！

松本 ソーシャルワーカー（SW）養成教育機関として理想とするワーカー像を教えてください。

市川 まず、どのように援助するのか、どうして援助をするのかが大切です。次に自分勝